



Program

プロコフィエフ:

Sergei Prokofiev
(1891~1953)

バイオリンソナタ 第2番 Op.94

Violin Sonata No.2 Op.94

I. Moderato

II. Allegretto scherzando

III. Andante

IV. Allegro con brio

ベートーヴェン:

Ludwig van Beethoven
(1770~1827)

チェロソナタ 第4番 Op.102-1 / 第5番 Op.102-2

Cello Sonata No.4 Op.102-1 / No.5 Op.102-2

No.4 I. Andante – Allegro vivace

II. Adagio – Tempo di'andante – Allegro vivace

No.5 I. Allegro con brio

II. Adagio con molto sentimento d'affetto

III. Allegro – Allegro fugato

— 休憩 —

ドヴォルザーク:

Antonín Dvořák
(1841~1904)

ピアノ五重奏曲 第2番 Op.81

Piano Quintet No.2 Op.81

I. Allegro, ma non tanto


II. Dumka: Andante con moto

III. Scherzo (Furiant): Molto vivace


IV. Finale: Allegro



Program Notes



プロコフィエフ：バイオリンソナタ 第2番 Op.94



Violin Sonata No.2 Op.94

プロコフィエフのバイオリンソナタについて語る時、巨匠バイオリニスト、ダヴィッド・オイストラフの名前は欠かせない。それはブラームスにはヨアヒム、グラスノフにはアウワーといった、作曲家と名手が互いに刺激し合って傑作を誕生させた関係と全く同じである。

1943年戦時下のモスクワでフルートソナタとして作曲されたが、信頼を寄せる友人でもあった名手オイストラフからバイオリン用に編曲するよう提案があり彼はそれを快諾、翌1944年6月にモスクワでオイストラフとオポーリンのコンビで初演された。

戦争の暗い影を思わせる1番に比べ新鮮な叙情味に溢れ尚且つアバンギャルドさも併せ持つこの2番は、世界的にも人気が高く、今ではフルートより圧倒的にバイオリンソナタとして演奏される機会が多い。

第1楽章 モデラート

甘いメロディーと不思議な和声で瞬く間にプロコフィエフの世界へ誘われる。

第2楽章 アレグレット スケルツァンド

アバンギャルドなスケルツォが前衛的で面白い。

第3楽章 アンダンテ

夢想の世界が拡がり再び前衛的なフィナーレにつながっていく。

第4楽章 アレグロ コン ブリオ

プロコフィエフ真骨頂の圧巻さを見せつけながら洗練されたセンスも感じさせる。



ベートーヴェン：チェロソナタ 第4番 Op.102-1 / 第5番 Op.102-2

Cello Sonata No.4 Op.102-1 / No.5 Op.102-2



1815年、44歳のベートーヴェンは7年前に第3番のチェロソナタを書いた頃から続いた「傑作の森」と呼ばれる充実した彼の音楽人生の中盤を終え、さらに深淵な彼独自の世界に入ろうとしていた。当時ウィーンで名声を博していた弦楽四重奏団のチェリスト、ヨーゼフ・リンケとベートーヴェンの生涯の友であったエルデーディ伯爵夫人によって初演されたこの2曲は、彼のエルデーディへの敬愛の想いに溢れた珠玉の作品である。

第4番

第1楽章 アンダンテ - アレグロ ヴィヴァーチェ

慈愛に満ちた豊かな旋律とチェロとピアノの美しい掛け合いが見事。その後、一変して迫力を増していく。

第2楽章 アダージョ - テンポド アンダンテ - アレグロ ヴィヴァーチェ

このような自由な即興的な書き方も今までのベートーヴェンにはなかったもので、とてもプライベートな雰囲気を感じさせる。優しさに溢れた始まりはこのままベートーヴェンとエルデーディの話し声にさえ聞こえてくる。

第5番

第1楽章 アレグロ コン プリオ

快活なピアノから始まり、音楽は流麗な自信にあふれて進んでいく。

第2楽章 アダージョ コン モルト センティメンテ ダフェット

低音で奏でられる宗教的な深い悲しみを堪えたような響きに心を揺さぶられる。ベートーヴェンはチェロソナタを5曲書いた中で、ここだけに緩徐楽章を入れている。

第3楽章 アレグロ - アレグロ フガート

バッハを彷彿とさせるような圧倒的な完璧さで4声のフガを書き、これをフィナーレに持ってくる。これにも大作曲家ベートーヴェンの持つ力と天才ぶりを感ぜさせられる。



ドヴォルザーク：ピアノ五重奏曲 第2番 Op.81

Piano Quintet No.2 Op.81



ドヴォルザークが46歳の時にブラハで作曲した。この作品はドヴォルザークの代表的傑作のひとつに数えられるだけにとどまらず、シューベルトの「ます」、シューマン、ブラームス、フランクのそれと共に、古今のピアノ五重奏の五大名曲に挙げられるものである。また中声部のヴィオラを重んじて、その特色を生かしているのもこの楽器を好んで弾いたドヴォルザークの性格を強く出したものである。彼の色彩、メランコリックな雰囲気と幸福感に満ちた味わいの絶妙な交錯、ロマンティックな旋律がふんだんに表現されている。

第1楽章 アレグロ マノンタント

どこか懐かしい親しみやすいメロディーから始まり、展開部ではヴィオラが哀愁的に歌うのが印象的。表情豊かに再現部を第1バイオリンが表したあと、皆で力強く壮麗なクライマックスを迎える。

第2楽章 ドゥムカ アンダンテ コン モート

スラヴの哀歌(ドゥムカ)によるドヴォルザークの個性的な楽章である。ピアノが静かに悲しい旋律を奏で出し、ヴィオラとバイオリンとが情感を深めていく。

第3楽章 スケルツォ(フリアント)モルト ヴィヴァーチェ

フリアントというスケルツォ。フリアントはチェコ地方の急速な舞曲で、激しい部分とのびやかな部分とからなっている。

第4楽章 フィナーレ アレグロ

全体をスラヴ特有の激しい情感が包み、ボヘミアの大地に想いを馳せるような感極まる終曲。最後に、温かい涙が頬を伝うようなノスタルジーにかられるメロディーをバイオリンとピアノが順番に奏でたあと、逞しく盛り上がっていくコーダで力強く終わる。